



## 「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第3回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

### 「勝負 そして修行」

甘肅省 修柯

1998年頃、一人の日本人男性が酒泉を訪れ、路上の囲碁対局で偶然何局かを指すことになった。こうした庶民生活の雰囲気色が濃く漂う街角に外国人が訪れるのはとても少ないため、彼が現れると辺りの囲碁好きの注目の的となり、みんなに取り囲まれていた。囲碁の指し方は中国でも日本でも基本的に違わず、言葉が通じなくても支障なく“手で語る”ことができるのである。

反省しなければならないのは、この中日の民間囲碁交流において、私達がホストに相應しい振る舞いをしていなかったことである。この日本からの碁友が強かったため、中国側は彼を“袋だたき”にし始めたのである。次々に口を出すばかりか、碁石の動きをあからさまに指示する者までいた。たまり兼ねた日本人は、ギャラリーにルールを守るよう意思表示することしかできなかったのである。中国の街なかにある路上の囲碁対局では、手出し口出しがあるのは日常茶飯事なのだが、彼は知らなかったのだろう。

『源氏物語』、『名人』、庶民の生活を映し出したドラマ『男はつらいよ』に描かれる囲碁は、いずれも静かで雅な行為であり、大勢の人間が騒ぐような場面はない。肉体労働に従事する囲碁好きであっても、対局は尊重している。ひとたび対局になれば、ひっそりとして仄暗く孤独な世界に入った。一これは、日本文化の精神ととても調和した現象ではないだろうか。囲碁に対する日本の貢献は、囲碁に対する尊重を築き上げたことではないかと思う。

20年前、囲碁を学んだ時に最初から知っていたのは、聶衛平、馬曉春などを除くと、大多数が日本の棋手の名前だった。碁友の多くも、そんなところだったろう。路上で対局していると、「こんな広い空は武宮でも囲みきれないのに、ここ酒泉の棋手が囲い込むとは大したもんだ！」という声が自然に耳に入ってきたものである。当然、これを賞賛と理解してはいけないのである。

囲碁を知ってから20年、この間に“指す人”、“指すこと”に対する認識が少しずつ蓄積されてきた。一人で静かに座っている時、訳もなく彼らのことが繰り返し思い出される—

呉清源が日本へ囲碁留学をしようとしている時、「北京の天才少年が日本へやって来て、将来、名人位を奪取されたらどうしますか。」とある人に尋ねられた越瀬憲作氏は、「それこそ、自分の宿願です。」と答えたという。

広島で原子爆弾が爆発した時、当地では橋本宇太郎氏と岩本薫正氏が名人戦の対局をしているところであった。橋本氏は爆発により庭へ放り出され、盤面も乱れたが、二人の対局者は中断時のように盤面を並べ直し、対局を続行した。

呉清源氏が木谷実氏との対局中に指し方を真似ると、木谷氏は「囲碁においては二局として完全に同じ形が現れることはありません。だから、毎局全てを重視し、真剣に指すのです。」と言った。70年の時を隔て、呉清源は彼の自叙伝『中の精神』でもこの件に言及し、木谷氏に対する心からの敬意を述べている。

1992年、67歳の藤沢秀行が3勝2敗で小林光一を破り“王座”を防衛した。日本の囲碁界で尊敬を集めるこの先輩は、後に「囲碁に限らず、競輪でも競馬でも、私の闘志はまだ衰えていません。心から情熱が失せると人も老いるのです。」と語っている。

“大竹美学”によると、歪んだ形に指す棋手は人生全般を失敗することもあり得るという。大竹英雄という人は、勝てる勝負であっても、決して“俗筋”は指さなかった。「こう指せば棋譜が汚れます。後輩にどう引き継ぐのですか。この指し方を後代に残しておくのです。」

囲碁は“勝負の芸術”と称されている。勿論、勝負というのは理解しやすいが、芸術という認識はどうだろうか。

江戸四大棋士の二百余年に亘る技と名誉の追求の中、以降の主要新聞各紙タイトル戦の熾烈な争奪の中、囲碁の発祥の地である中国で民族の榮譽に対する強烈な思いが与えられている囲碁の対局の中、当時、囲碁に芸術そのものを見ることはできなかつたのかもしれないが、まだ冷めやらぬガラスの碁石のように眩い光を乱反射させ、かなりの迫力であった。

時は流れ、今、改めてあの対局、あの人々と出来事を振り返ると、勝負は最はや見えなくなっている。見えるのは、ひとつの碁石が時間を掛けて磨かれてきたことによる柔和さ、優しさである。あれらの傑出した人々やその対局、言行は、砂に埋もれたダイヤモンドのようなもので、知らず知らずのうちに私達の心を磨き、変えてくれる。こうして磨かれていくうち、元もと心にあった横暴さや卑怯さが次第に消え去り、理性、温和さ、堅固な信念、さらに人や世界に対する認識がより明確になってくる。最後に、私達のような囲碁に対する理解が浅い人間でも、彼らの助けを借りて知ることができることは、真に私達が影響されるのは碁石ひとつの生死でも一局の勝敗でもなく、囲碁の歴史において傑出した無数の棋手による勝負を超越した人生の芸術なのである。